

JP00/6945 日 本 国 特 許 庁  
4  
PATENT OFFICE  
JAPANESE GOVERNMENT

05.10.00

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日  
Date of Application:

1999年10月 8日

REC'D 28 NOV 2000

出 願 番 号  
Application Number:

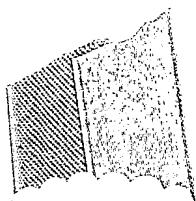
平成11年特許願第288838号

WIPO

PCT

出 願 人  
Applicant (s):

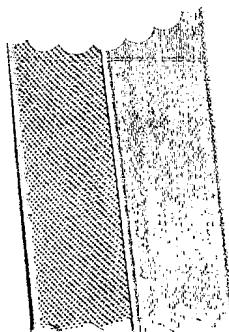
三井化学株式会社



## PRIORITY DOCUMENT

SUBMITTED OR TRANSMITTED IN  
COMPLIANCE WITH RULE 17.1(a) OR (b)

2000年11月10日



特許庁長官  
Commissioner,  
Patent Office

及川耕造  


出証番号 出証特2000-3092547

【書類名】 特許願  
【整理番号】 Y0A450-010  
【提出日】 平成11年10月 8日  
【あて先】 特許庁長官 殿  
【発明者】  
【住所又は居所】 山口県玖珂郡和木町和木六丁目1番2号 三井化学株式  
会社内  
【氏名】 川合 浩二  
【発明者】  
【住所又は居所】 山口県玖珂郡和木町和木六丁目1番2号 三井化学株式  
会社内  
【氏名】 山下 正洋  
【発明者】  
【住所又は居所】 山口県玖珂郡和木町和木六丁目1番2号 三井化学株式  
会社内  
【氏名】 道上 憲司  
【発明者】  
【住所又は居所】 山口県玖珂郡和木町和木六丁目1番2号 三井化学株式  
会社内  
【氏名】 川原 信夫  
【発明者】  
【住所又は居所】 山口県玖珂郡和木町和木六丁目1番2号 三井化学株式  
会社内  
【氏名】 土肥 靖  
【発明者】  
【住所又は居所】 山口県玖珂郡和木町和木六丁目1番2号 三井化学株式  
会社内  
【氏名】 兼吉 寛矛

【特許出願人】

【識別番号】 000005887

【氏名又は名称】 三井化学株式会社

【代理人】

【識別番号】 100081994

【弁理士】

【氏名又は名称】 鈴木 俊一郎

【選任した代理人】

【識別番号】 100103218

【弁理士】

【氏名又は名称】 牧村 浩次

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 014535

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9710873

【ブルーフの要否】 要

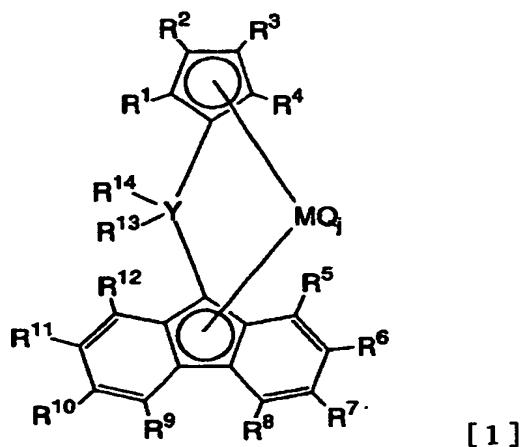
【書類名】 明細書

【発明の名称】 メタロセン化合物、オレフィン重合用触媒及びポリオレフィンの製造方法

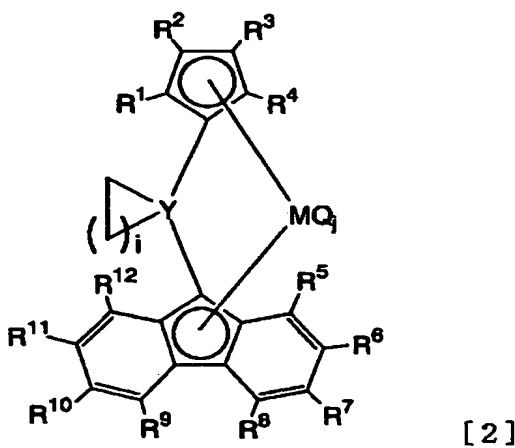
【特許請求の範囲】

【請求項1】 下記一般式〔1〕または〔2〕で表されるメタロセン化合物；

【化1】



【化2】



(式中、R<sup>1</sup>、R<sup>3</sup>は炭化水素基、ケイ素含有炭化水素基から選ばれ、R<sup>2</sup>、R<sup>4</sup>、R<sup>5</sup>、R<sup>6</sup>、R<sup>7</sup>、R<sup>8</sup>、R<sup>9</sup>、R<sup>10</sup>、R<sup>11</sup>、R<sup>12</sup>は水素、炭化水素基、ケイ素含有炭化水素基から選ばれ、それぞれ同一でも異なっていてもよいが、一般式〔1〕の化合物の場合はR<sup>6</sup>、R<sup>7</sup>、R<sup>10</sup>、R<sup>11</sup>の4つが同時に水素ではなく、R<sup>13</sup>、R

$^{14}$ は水素、炭化水素基から選ばれ、それぞれ同一でも異なっていてもよく、Mは周期表第4族から選ばれた金属であり、Yは炭素またはケイ素であり、Qはハロゲン、炭化水素基、アニオン配位子または孤立電子対で配位可能な中性配位子から同一または異なる組合せで選んでもよく、jは1～4の整数、iは1～10の整数である。)。

【請求項2】 一般式[1]または[2]で表されるメタロセン化合物を含むオレフィン重合用触媒。

【請求項3】

(A) 上記一般式[1]または[2]で表されるメタロセン化合物と、

(B) (B-1) 有機金属化合物、

(B-2) 有機アルミニウムオキシ化合物、および

(B-3) メタロセン化合物(A)と反応してイオン対を形成する化合物

から選ばれる少なくとも1種の化合物とからなることを特徴とするオレフィン重合用触媒。

【請求項4】 請求項3に記載のオレフィン重合用触媒と(C)微粒子状担体からなることを特徴とするオレフィン重合用触媒。

【請求項5】 請求項2～4のいずれかに記載のオレフィン重合用触媒の存在下に、オレフィンを重合することを特徴とするポリオレフィンの製造方法。

【請求項6】 ポリオレフィンが单一のオレフィンからなるホモポリマーである請求項5記載のポリオレフィンの製造方法。

【請求項7】 一般式[1]で、R<sup>1</sup>、R<sup>13</sup>、R<sup>14</sup>がメチル、R<sup>3</sup>がtert-ブチル、R<sup>2</sup>、R<sup>4</sup>、R<sup>5</sup>、R<sup>6</sup>、R<sup>8</sup>、R<sup>9</sup>、R<sup>11</sup>、R<sup>12</sup>が水素、R<sup>7</sup>、R<sup>10</sup>がtert-ブチル、Mがジルコニウム、Yが炭素、Qが塩素、jが2であるメタロセン化合物。

【請求項8】 一般式[1]で、R<sup>1</sup>、R<sup>13</sup>、R<sup>14</sup>がメチル、R<sup>3</sup>がtert-ブチル、R<sup>2</sup>、R<sup>4</sup>、R<sup>5</sup>、R<sup>7</sup>、R<sup>8</sup>、R<sup>9</sup>、R<sup>10</sup>、R<sup>12</sup>が水素、R<sup>6</sup>、R<sup>11</sup>がtert-ブチル、Mがジルコニウム、Yが炭素、Qが塩素、jが2であるメタロセン化合物。

【請求項9】 一般式[2]でR<sup>1</sup>がメチル、R<sup>3</sup>がtert-ブチル、R<sup>2</sup>、R<sup>4</sup>、

$R^5$ 、 $R^6$ 、 $R^7$ 、 $R^8$ 、 $R^9$ 、 $R^{10}$ 、 $R^{11}$ 、 $R^{12}$ が水素、Mがジルコニウム、Yが炭素、Qが塩素、jが2、iが4であるメタロセン化合物。

【請求項10】一般式[2]で $R^1$ がメチル、 $R^2$ がtert-ブチル、 $R^2$ 、 $R^4$ 、 $R^5$ 、 $R^6$ 、 $R^8$ 、 $R^9$ 、 $R^{11}$ 、 $R^{12}$ が水素、 $R^7$ 、 $R^{10}$ がtert-ブチル、Mがジルコニウム、Yが炭素、Qが塩素、jが2、iが4であるメタロセン化合物。

#### 【発明の詳細な説明】

##### 【0001】

##### 【発明の技術分野】

本発明は、特定の構造を有するメタロセン化合物とそれを含むオレフィン重合用触媒、及びポリオレフィンの製造方法に関する。

##### 【0002】

##### 【発明の技術的背景】

オレフィン重合用の均一系触媒としては、いわゆるメタロセン化合物がよく知られている。通常のメタロセン化合物を用いてオレフィンを重合する方法、特に $\alpha$ -オレフィンを立体規則性重合する方法は、W. Kaminskyらによってアイソタクティック重合が報告されて以来 (Angew. Chem. Int. Ed. Engl, 24, 507 (1985)) 多くの改良がなされている。これらの改良例として、メタロセン化合物のリガンド部分のシクロペンタジエニル基の水素の幾つかをアルキル基で置換したC2対称構造を有するメタロセン化合物が報告されており (山崎ら、Chemistry Letters, 1853 (1989)、特開平4-268307号公報等)、また、同様な試みとしてC2対称構造を有するビスインデニル誘導体をリガンドとするメタロセン化合物により、オレフィン重合体のアイソタクティック立体規則性を改良しようとする試みが数多く報告されている (例えば、Angew. Chem. Int. Ed. Engl, 31, 1347 (1992)、Organometallics, 13, 954 (1994)等)。

##### 【0003】

しかしながら、C2対称構造のメタロセン化合物は通常ラセミ体とメソ体の混合物として得られ、ラセミ体のみがアイソタクティック重合体を与えメソ体からはアタクティックな重合体しか得られない為、アイソタクティック重合体を選択的に得るためにラセミ体とメソ体を分離する必要がある。

一方、J. A. Ewenは、シクロペンタジエニル基とフルオレニル基をジメチルメチレンで架橋したC<sub>2</sub>対称構造を有するメタロセン化合物が、 $\alpha$ -オレフィンをシンジオタクティックな立体規則性で重合することを見出した (J. Am. Chem. Soc., 110, 6255 (1988))。このメタロセンの改良として、フルオレニル基の2位と7位にtert-ブチル基を導入することにより、シンジオタクティック立体規則性をさらに制御する試みがなされている (特開平4-69394号公報)。

#### 【0004】

さらに、上述のC<sub>2</sub>対称、C<sub>2</sub>s対称とは異なる、C<sub>1</sub>対称構造を有するメタロセン化合物により、アイソタクティックな重合体を合成する試みも報告されている (例えば特開平3-193796、特開平6-122718、EP 0881236等)。

しかしながら、これらのメタロセン化合物の重合性能は未だ充分ではなく、更に重合性能の優れたメタロセン化合物の出現が望まれていた。

#### 【0005】

##### 【発明の目的】

本発明は、上記のような従来技術に鑑みてなされたものであって、特定の構造を有するメタロセン化合物とそれを含むオレフィン重合用触媒、及びポリオレフィンの製造方法を提供することを目的としている。

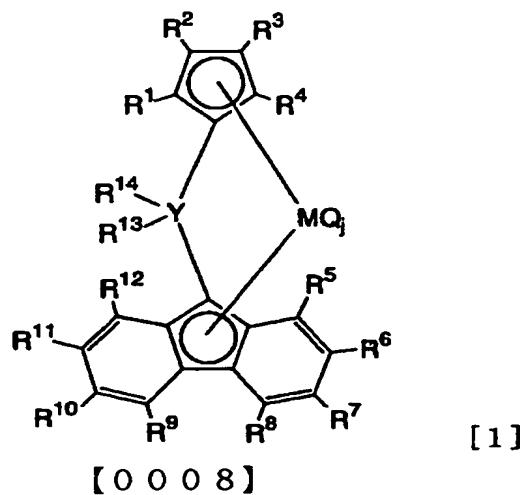
#### 【0006】

##### 【発明の概要】

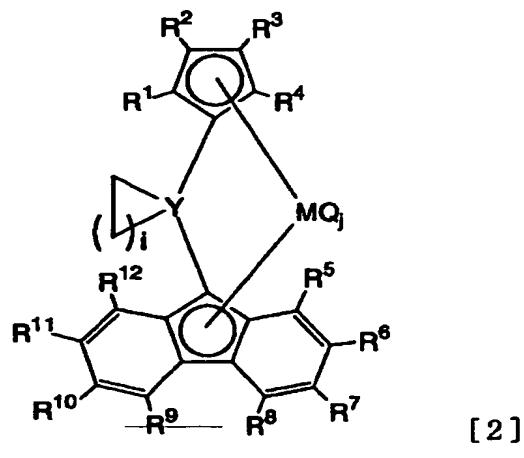
本発明に係るメタロセン化合物は、下記一般式【1】または【2】で表されることを特徴としている。

#### 【0007】

## 【化3】



## 【化4】



(式中、R<sup>1</sup>、R<sup>3</sup>は炭化水素基、ケイ素含有炭化水素基から選ばれ、R<sup>2</sup>、R<sup>4</sup>、R<sup>5</sup>、R<sup>6</sup>、R<sup>7</sup>、R<sup>8</sup>、R<sup>9</sup>、R<sup>10</sup>、R<sup>11</sup>、R<sup>12</sup>は水素、炭化水素基、ケイ素含有炭化水素基から選ばれ、それぞれ同一でも異なっていてもよいが、一般式 [1] の化合物の場合はR<sup>6</sup>、R<sup>7</sup>、R<sup>10</sup>、R<sup>11</sup>の4つが同時に水素ではなく、R<sup>13</sup>、R<sup>14</sup>は水素、炭化水素基から選ばれ、それぞれ同一でも異なっていてもよく、Mは周期表第4族から選ばれた金属であり、Yは炭素またはケイ素であり、Qはハロゲン、炭化水素基、アニオン配位子または孤立電子対で配位可能な中性配位子から同一または異なる組合せで選んでもよく、jは1～4の整数、iは1～10の整数である。)

本発明に係るオレフィン製造用触媒は、上記一般式〔1〕または〔2〕で表されるメタロセン化合物を含むことを特徴としている。

## 【0010】

本発明に係るポリオレフィンの製造方法は、上記一般式〔1〕または〔2〕で表されるメタロセン化合物を含むオレフィン重合用触媒を用いてポリオレフィンを製造することを特徴としている。

## 【0011】

## 【発明の具体的な説明】

以下本発明に係わるメタロセン化合物、オレフィン重合用触媒及びポリオレフィンの製造方法について具体的に説明する。

本発明において、上記一般式〔1〕または〔2〕のR<sup>1</sup>、R<sup>3</sup>は炭化水素基、ケイ素含有炭化水素基から選ばれる。

## 【0012】

炭化水素基としては、好ましくは炭素数1～20のアルキル基、炭素数7～20のアリールアルキル基、炭素数6～20のアリール基、または炭素数7～20のアルキルアリール基であり、その具体例としては、メチル、エチル、n-プロピル、イソプロピル、2-メチルプロピル、1,1-ジメチルプロピル、2,2-ジメチルプロピル、1,1-ジエチルプロピル、1-エチル-1-メチルプロピル、tert-ブチル、シクロヘキシル、シクロヘキシルメチル、メンチル、アダマンチル、ベンジル、2-フェニルエチル、フェニル、ナフチル、トリル等が挙げられる。

## 【0013】

ケイ素含有炭化水素基としては、好ましくはケイ素数1～4、炭素数3～20のアルキルまたはアリールシリル基であり、その具体例としては、トリメチルシリル、tert-ブチルジメチルシリル、トリフェニルシリル等が挙げられる。なお、R<sup>3</sup>は立体的に嵩高い置換基であることが好ましく、炭素数4以上の置換基であることがより好ましい。

## 【0014】

本発明において、上記一般式〔1〕または〔2〕のR<sup>2</sup>、R<sup>4</sup>、R<sup>5</sup>、R<sup>6</sup>、R<sup>7</sup>、R<sup>8</sup>、R<sup>9</sup>、R<sup>10</sup>、R<sup>11</sup>、R<sup>12</sup>は水素、炭化水素基、ケイ素含有炭化水素基から

選ばれ、それぞれ同一でも異なっていてもよい。好ましい炭化水素基、ケイ素含有炭化水素基の具体例としては、上記と同様のものを挙げることができる。

また、フルオレン環上の $R^5$ から $R^{12}$ の置換基は、合成上の容易さから左右対称、すなわち $R^5 = R^{12}$ 、 $R^6 = R^{11}$ 、 $R^7 = R^{10}$ 、 $R^8 = R^9$ であることが好ましく、無置換フルオレン、3, 6-二置換フルオレン、または2, 7-二置換フルオレンであることがより好ましい。ここでフルオレン環上の3位、6位、2位、7位はそれぞれ $R^7$ 、 $R^{10}$ 、 $R^6$ 、 $R^{11}$ に対応する。

#### 【0015】

上記一般式〔1〕の $R^{13}$ と $R^{14}$ は、水素、炭化水素基から選ばれ、それぞれ同一でも異なっていてもよい。好ましい炭化水素基の具体例としては、上記と同様のものを挙げることができる。

Yは炭素またはケイ素である。一般式〔1〕の場合は、 $R^{13}$ と $R^{14}$ はYと結合し、置換メチレン基または置換シリレン基を構成する。好ましい具体例として、例えば、メチレン、ジメチルメチレン、ジイソプロピルメチレン、メチルtert-ブチルメチレン、ジシクロヘキシルメチレン、メチルシクロヘキシルメチレン、ジフェニルメチレン、ジナフチルメチレンまたはジメチルシリレン、ジイソプロピルシリレン、メチルtert-ブチルシリレン、ジシクロヘキシルシリレン、メチルシクロヘキシルシリレン、ジフェニルシリレン、ジナフチルシリレン等を挙げることができる。

#### 【0016】

一般式〔2〕の場合は、Yはiが1～10のシクロアルカンジイル基と結合し、シクロアルキリデン基またはシクロメチレンシリレン基を構成する。好ましい具体例として、例えば、シクロプロピリデン、シクロブチリデン、シクロペンチリデン、シクロヘキシリデン、シクロヘプチリデン、シクロジメチレンシリレン、シクロトリメチレンシリレン、シクロテトラメチレンシリレン、シクロペンタメチレンシリレン、シクロヘキサメチレンシリレン、シクロヘプタメチレンシリレン等を挙げることができる。

#### 【0017】

本発明において、一般式〔1〕のMは、周期表第4族から選ばれる金属であり

、Mとしてはチタニウム、ジルコニウム、ハフニウムが挙げられる。Qはハロゲン、炭素数1～20の炭化水素基、アニオン配位子、または孤立電子対で配位可能な中性配位子から同一または異なる組合せで選ばれる。ハロゲンの具体例としては、フッ素、塩素、臭素、ヨウ素であり、炭化水素基の具体例としては、上記と同様のものを挙げることができる。アニオン配位子の具体例としては、メトキシ、tert-ブロキシ、フェノキシ等のアルコキシ基、アセテート、ベンゾエート等のカルボキシレート基、メシレート、トシレート等のスルホネート基等が挙げられる。孤立電子対で配位可能な中性配位子の具体例としては、トリメチルホスフィン、トリエチルホスフィン、トリフェニルホスフィン、ジフェニルメチルホスフィンなどの有機リン化合物、またはテトラヒドロフラン、ジエチルエーテル、ジオキサン、1,2-ジメトキシエタン等のエーテル類が挙げられる。これらのうち、Qは同一でも異なった組み合わせでもよいが、少なくとも一つはハロゲンまたはアルキル基であるのが好ましい。

#### 【0018】

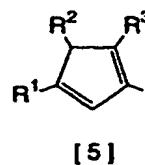
次に、本発明で用いる一般式〔1〕または〔2〕で表されるメタロセン化合物の製造法を、以下具体的に例を挙げて説明するが、これは発明の範囲を制限するものではなく、公知のいかなる方法で製造されてもよい。

まず一般式〔1〕の前駆体化合物〔3〕は、一般式〔A〕または〔B〕のような方法で選択的に製造することができる。

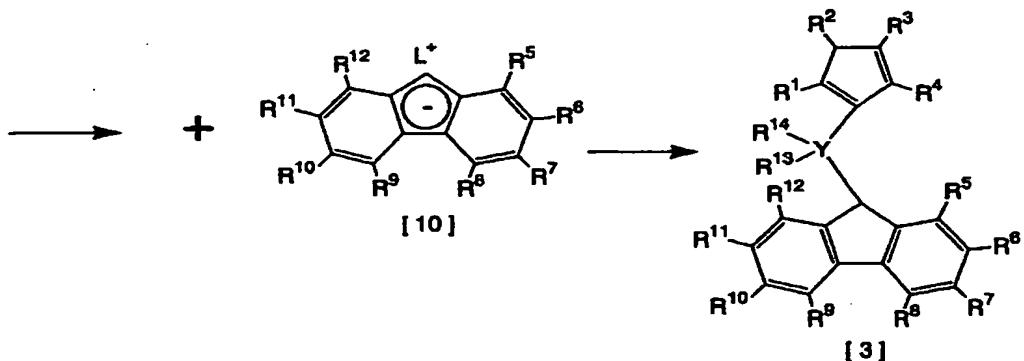
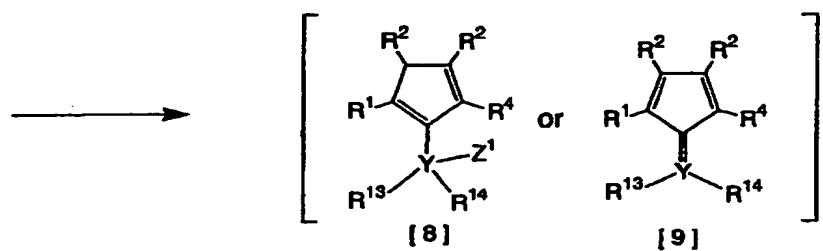
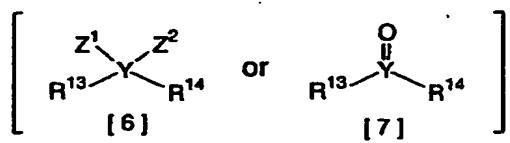
#### 【0019】

【化5】

[A]



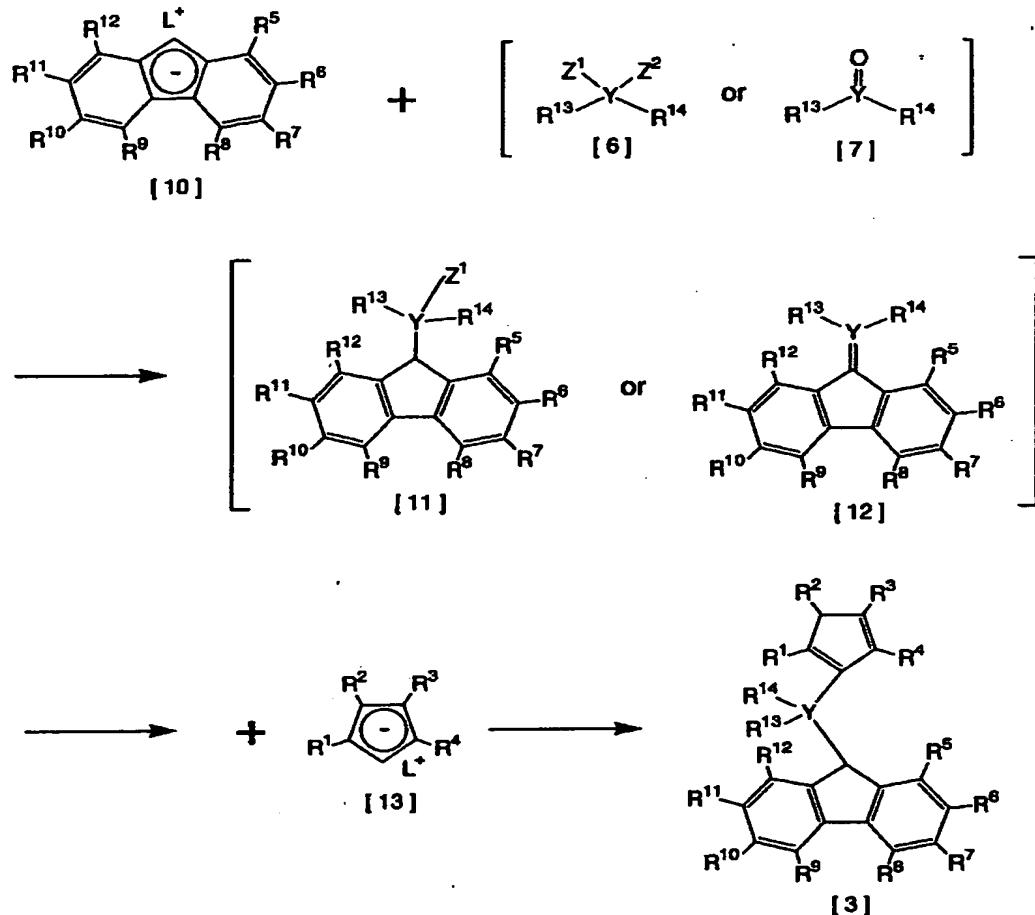
+



【0020】

## 【化6】

[B]



【0021】

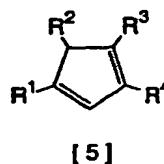
(式中、R<sup>1</sup>～R<sup>14</sup>およびYは一般式 [1] と同一であり、Lはアルカリ金属である。Z<sup>1</sup>、Z<sup>2</sup>はハロゲンまたはアニオン配位子であり、これらは同一でも、または異なる組合せでもよい。また、[5]、[8]、[3]はシクロペンタジエニル環における2重結合の位置のみが異なる異性体の存在を考えることができ、それらのうちの一種のみ例示してあるが、シクロペンタジエニル環における2重結合の位置のみが異なる他の異性体であっても良く、またはそれらの混合物であっても良い。)

また、一般式 [2] の前駆体化合物 [4] は、一般式 [C] または [D] のような方法で製造することができる。

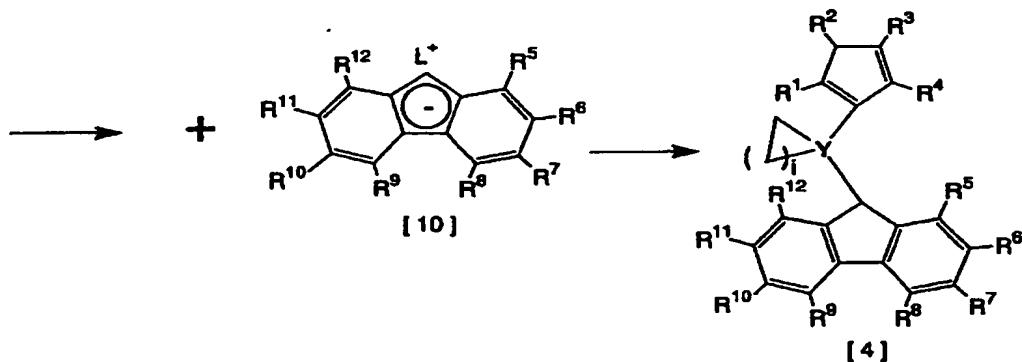
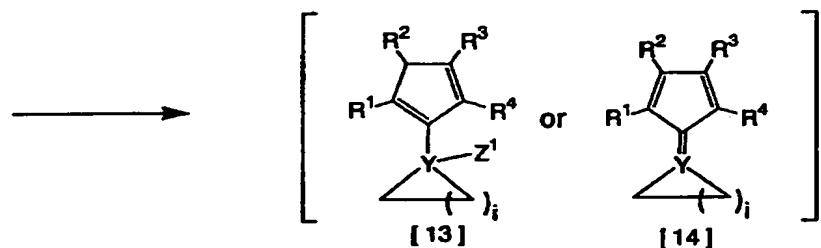
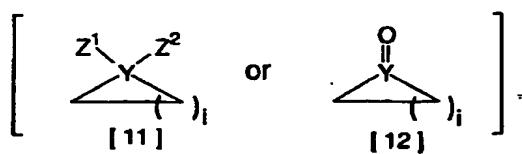
【0022】

【化7】

[C]



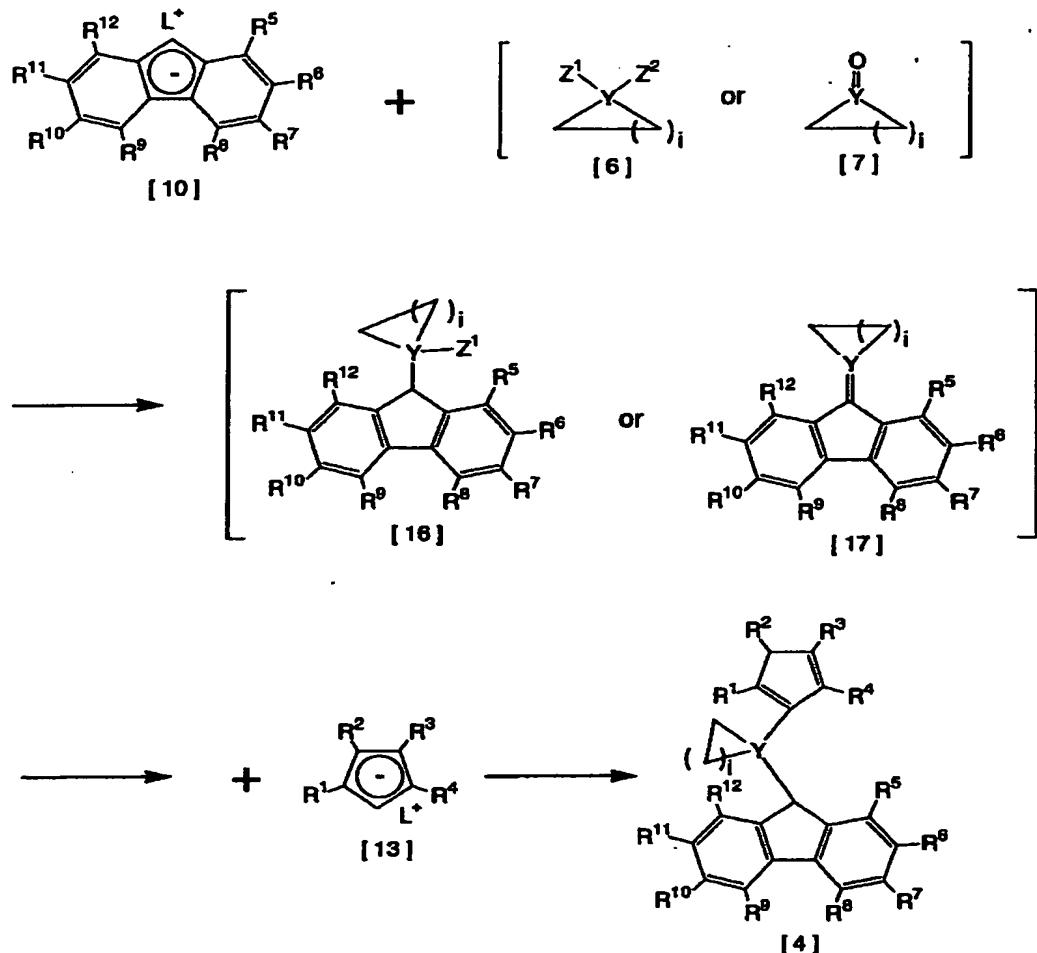
+



【0023】

【化 8】

[D]



【0024】

(式中、R<sup>1</sup>～R<sup>14</sup>、Yおよびiは一般式 [2] と同一であり、Lはアルカリ金属である。Z<sup>1</sup>、Z<sup>2</sup>はハロゲンまたはアニオン配位子であり、これらは同一でも、または異なる組合せでもよい。また、[13]、[4]は、シクロペンタジエニル環における2重結合の位置のみが異なる異性体の存在を考えることができ、それらのうちの一種のみ例示してあるが、シクロペンタジエニル環における2重結合の位置のみが異なる他の異性体であっても良く、またはそれらの混合物であっても良い。)

上記一般式 [A] ～ [D] の反応に用いられるアルカリ金属としては、リチウム、ナトリウムまたはカリウムが挙げられ、アルカリ土類金属としてはマグネシ

ウム、カルシウムが挙げられる。また、ハロゲンとしては、フッ素、塩素、臭素、ヨウ素が挙げられる。アニオン配位子の具体例としては、メトキシ、tert-ブロキシ、フェノキシ等のアルコキシ基、アセテート、ベンゾエート等のカルボキシレート基、メシレート、トシレート等のスルホネート基等が挙げられる。

## 【0025】

次に、一般式【3】または【4】の前駆体化合物からメタロセン化合物を製造する例を以下に示すが、これは発明の範囲を制限するものではなく、公知のいかなる方法で製造されてもよい。

一般式【A】、【B】または一般式【C】、【D】の反応で得られた一般式【3】または【4】の前駆体化合物は、有機溶媒中でアルカリ金属、水素化アルカリ金属または有機アルカリ金属と、反応温度が-80℃～200℃の範囲で接触させることで、ジアルカリ金属塩とする。

## 【0026】

上記反応で用いられる有機溶媒としては、ペンタン、ヘキサン、ヘプタン、シクロヘキサン、デカリン等の脂肪族炭化水素、またはベンゼン、トルエン、キシレン等の芳香族炭化水素、またはTHF、ジエチルエーテル、ジオキサン、1,2-ジメトキシエタン等のエーテル、またはジクロロメタン、クロロホルム等のハロゲン化炭化水素等が挙げられる。

## 【0027】

また上記反応で用いられるアルカリ金属としては、リチウム、ナトリウム、カリウム等が挙げられ、水素化アルカリ金属としては、水素化ナトリウム、水素化カリウム等が挙げられ、有機アルカリ金属としては、メチルリチウム、ブチルリチウム、フェニルリチウム等が挙げられる。

次に上記の該ジアルカリ金属塩を、一般式【18】

$MZ_k$  [18]

(式中、Mは周期表第4族から選ばれた金属であり、Zはハロゲン、アニオン配位子または孤立電子対で配位可能な中性配位子から同一または異なる組合せで選んでもよく、kは3～6の整数である。)

で表される化合物と、有機溶媒中で反応させることで、一般式【1】または【2】

] で表されるメタロセン化合物を合成することができる。

【0028】

一般式 [18] で表される化合物の好ましい具体的として、三価または四価のチタニウムフッ化物、塩化物、臭化物及びヨウ化物、四価のジルコニウムフッ化物、塩化物、臭化物及びヨウ化物、四価のハフニウムフッ化物、塩化物、臭化物及びヨウ化物、またはこれらのTHF、ジエチルエーテル、ジオキサンまたは1, 2-ジメトキシエタン等のエーテル類との錯体を挙げることができる。

【0029】

また、用いられる有機溶媒としては前記と同様のものを挙げることができる。該ジアルカリ金属塩と一般式 [18] で表される化合物との反応は、好ましくは等モル反応で行い、前記の有機溶媒中で、反応温度が-80°C~200°Cの範囲で行うことができる。

反応で得られたメタロセン化合物は、抽出、再結晶、昇華等の方法により、単離・精製を行うことができる。

【0030】

以下に本発明における上記メタロセン化合物の具体例を示すが、特にこれによって本発明の範囲が限定されるものではない。なお、表記上、Cp（シクロペンタジエニル環部分）、Flu（フルオレニル環部分）、Bridge（架橋部分）、MQj（金属部分）の4つに分けて具体例を表示した。

【0031】

【化9】

Cp	Flu	Bridge	MQ <sub>j</sub>
			ZrCl <sub>2</sub>

【0032】

【化10】

Cp	Flu	Bridge	MQ <sub>j</sub>
			ZrCl <sub>2</sub>

【0033】

## 【化11】

Cp	Flu	Bridge	MQ <sub>j</sub>
			ZrCl <sub>2</sub>
			ZrCl <sub>2</sub>
			ZrCl <sub>2</sub>
			ZrMe <sub>2</sub>

## 【0034】

本発明のメタロセン化合物を、オレフィン重合用触媒として用いる場合の好ましい態様につき、具体的に説明する。

本発明の方法によって製造されたメタロセン化合物をオレフィン重合用触媒として用いる場合、触媒成分は

(A) 上記一般式 [1] または [2] で表されるメタロセン化合物と、

(B) (B-1) 有機金属化合物、

(B-2) 有機アルミニウムオキシ化合物、および

(B-3) メタロセン化合物 (A) と反応してイオン対を形成する化合物

から選ばれる少なくとも1種の化合物、

さらに必要に応じて、

(C) 微粒子状担体

から構成される。

## 【0035】

以下に触媒を形成する成分 (B)、成分 (C) について具体的に説明する。

(B-1) 有機金属化合物

本発明で用いられる(B-1) 有機金属化合物として、具体的には下記のような周期表第1、2族および第12、13族の有機金属化合物が用いられる。

(B-1a) 一般式  $R^a_m Al (OR^b)_n H_p X_q$   
 (式中、 $R^a$  および  $R^b$  は、互いに同一でも異なっていてもよく、炭素原子数が1～15、好ましくは1～4の炭化水素基を示し、Xはハロゲン原子を示し、mは $0 < m \leq 3$ 、nは $0 \leq n < 3$ 、pは $0 \leq p < 3$ 、qは $0 \leq q < 3$ の数であり、かつ $m + n + p + q = 3$ である。)

で表される有機アルミニウム化合物。

## 【0036】

(B-1b) 一般式  $M^2 Al R^a_4$   
 (式中、 $M^2$  はLi、NaまたはKを示し、 $R^a$  は炭素原子数が1～15、好ましくは1～4の炭化水素基を示す。)

で表される1族金属とアルミニウムとの錯アルキル化合物。

(B-1c) 一般式  $R^a R^b M^3$   
 (式中、 $R^a$  および  $R^b$  は、互いに同一でも異なっていてもよく、炭素原子数が1～15、好ましくは1～4の炭化水素基を示し、 $M^3$  はMg、ZnまたはCdを示す。)

で表される2族または12族金属のジアルキル化合物。

## 【0037】

前記(B-1a)に属する有機アルミニウム化合物としては、次のような化合物などを例示できる。

一般式  $R^a_m Al (OR^b)_{3-m}$   
 (式中、 $R^a$  および  $R^b$  は、互いに同一でも異なっていてもよく、炭素原子数が1～15、好ましくは1～4の炭化水素基を示し、mは好ましくは1、 $5 \leq m \leq 3$ の数である。)

で表される有機アルミニウム化合物、

一般式  $R^a_m Al X_{3-m}$   
 (式中、 $R^a$  は炭素原子数が1～15、好ましくは1～4の炭化水素基を示し、

Xはハロゲン原子を示し、mは好ましくは $0 < m < 3$ である。)

で表される有機アルミニウム化合物、

一般式  $R^a_m AlH_{3-m}$

(式中、 $R^a$  は炭素原子数が1~15、好ましくは1~4の炭化水素基を示し、mは好ましくは $2 \leq m < 3$ である。)

で表される有機アルミニウム化合物、

一般式  $R^a_m Al(OR^b)_n X_q$

(式中、 $R^a$  および $R^b$  は、互いに同一でも異なっていてもよく、炭素原子数が1~15、好ましくは1~4の炭化水素基を示し、Xはハロゲン原子を示し、mは $0 < m \leq 3$ 、nは $0 \leq n < 3$ 、qは $0 \leq q < 3$ の数であり、かつ $m + n + q = 3$ である。)

で表される有機アルミニウム化合物。

### 【0038】

(B-1a)に属するアルミニウム化合物としてより具体的には

トリメチルアルミニウム、トリエチルアルミニウム、トリn-ブチルアルミニウム、トリプロピルアルミニウム、トリペンチルアルミニウム、トリヘキシルアルミニウム、トリオクチルアルミニウム、トリデシルアルミニウムなどのトリn-アルキルアルミニウム；

トリイソプロピルアルミニウム、トリイソブチルアルミニウム、トリsec-ブチルアルミニウム、トリtert-ブチルアルミニウム、トリ2-メチルブチルアルミニウム、トリ3-メチルブチルアルミニウム、トリ2-メチルペンチルアルミニウム、トリ3-メチルペンチルアルミニウム、トリ4-メチルペンチルアルミニウム、トリ2-メチルヘキシルアルミニウム、トリ3-メチルヘキシルアルミニウム、トリ2-エチルヘキシルアルミニウムなどのトリ分岐鎖アルキルアルミニウム；

トリシクロヘキシルアルミニウム、トリシクロオクチルアルミニウムなどのトリシクロアルキルアルミニウム；

トリフェニルアルミニウム、トリトリルアルミニウムなどのトリアリールアルミニウム；

ジイソブチルアルミニウムハイドライド、ジイソブチルアルミニウムハイドライ

イドなどのジアルキルアルミニウムハイドライド；

$(i-C_4H_9)_x Al_y (C_5H_{10})_z$  (式中、x、y、zは正の数であり、 $z \geq 2x$ である。) などで表されるイソプレニルアルミニウムなどのアルケニルアルミニウム；

イソブチルアルミニウムメトキシド、イソブチルアルミニウムエトキシド、イソブチルアルミニウムイソプロポキシドなどのアルキルアルミニウムアルコキシド；

ジメチルアルミニウムメトキシド、ジエチルアルミニウムエトキシド、ジブチルアルミニウムブトキシドなどのジアルキルアルミニウムアルコキシド；

エチルアルミニウムセスキエトキシド、ブチルアルミニウムセスキブトキシドなどのアルキルアルミニウムセスキアルコキシド；

$R_{2.5}^a Al (OR_{0.5}^b)$  などで表される平均組成を有する部分的にアルコキシ化されたアルキルアルミニウム；

ジエチルアルミニウムフェノキシド、ジエチルアルミニウム(2,6-ジ-t-ブチル-4-メチルフェノキシド)、エチルアルミニウムビス(2,6-ジ-t-ブチル-4-メチルフェノキシド)、ジイソブチルアルミニウム(2,6-ジ-t-ブチル-4-メチルフェノキシド)、イソブチルアルミニウムビス(2,6-ジ-t-ブチル-4-メチルフェノキシド)などのアルキルアルミニウムアリーロキシド；

ジメチルアルミニウムクロリド、ジエチルアルミニウムクロリド、ジブチルアルミニウムクロリド、ジエチルアルミニウムブロミド、ジイソブチルアルミニウムクロリドなどのジアルキルアルミニウムハライド；

エチルアルミニウムセスキクロリド、ブチルアルミニウムセスキクロリド、エチルアルミニウムセスキブロミドなどのアルキルアルミニウムセスキハライド；

エチルアルミニウムジクロリド、プロピルアルミニウムジクロリド、ブチルアルミニウムジブロミドなどのアルキルアルミニウムジハライドなどの部分的にハロゲン化されたアルキルアルミニウム；

ジエチルアルミニウムヒドリド、ジブチルアルミニウムヒドリドなどのジアルキルアルミニウムヒドリド；

エチルアルミニウムジヒドリド、プロピルアルミニウムジヒドリドなどのアル

キルアルミニウムジヒドリドなどその他の部分的に水素化されたアルキルアルミニウム；

エチルアルミニウムエトキシクロリド、ブチルアルミニウムブトキシクロリド、エチルアルミニウムエトキシプロミドなどの部分的にアルコキシ化およびハロゲン化されたアルキルアルミニウムなどを挙げることができる。

#### 【0039】

また(B-1a)に類似する化合物も使用することができ、たとえば窒素原子を介して2以上のアルミニウム化合物が結合した有機アルミニウム化合物を挙げることができる。このような化合物として具体的には、

$(C_2H_5)_2AlN(C_2H_5)Al(C_2H_5)_2$   
などを挙げることができる。

#### 【0040】

前記(B-1b)に属する化合物としては、

$LiAl(C_2H_5)_4$

$LiAl(C_7H_{15})_4$ などを挙げることができる。

さらにその他にも、(B-1) 有機金属化合物としては、メチルリチウム、エチルリチウム、プロピルリチウム、ブチルリチウム、メチルマグネシウムブロミド、メチルマグネシウムクロリド、エチルマグネシウムブロミド、エチルマグネシウムクロリド、プロピルマグネシウムブロミド、プロピルマグネシウムクロリド、ブチルマグネシウムブロミド、ブチルマグネシウムクロリド、ジメチルマグネシウム、ジエチルマグネシウム、ジブチルマグネシウム、ブチルエチルマグネシウムなどを使用することもできる。

#### 【0041】

また重合系内で上記有機アルミニウム化合物が形成されるような化合物、たとえばハロゲン化アルミニウムとアルキルリチウムとの組合せ、またはハロゲン化アルミニウムとアルキルマグネシウムとの組合せなどを使用することもできる。

これらのうち、有機アルミニウム化合物が好ましい。

上記のような(B-1) 有機金属化合物は、1種単独でまたは2種以上組み合わせて用いられる。

## 【0042】

## (B-2) 有機アルミニウムオキシ化合物

本発明で用いられる(B-2) 有機アルミニウムオキシ化合物は、従来公知のアルミニノキサンであってもよく、また特開平2-78687号公報に例示されているようなベンゼン不溶性の有機アルミニウムオキシ化合物であってもよい。

従来公知のアルミニノキサンは、たとえば下記のような方法によって製造することができ、通常、炭化水素溶媒の溶液として得られる。

(1) 吸着水を含有する化合物または結晶水を含有する塩類、たとえば塩化マグネシウム水和物、硫酸銅水和物、硫酸アルミニウム水和物、硫酸ニッケル水和物、塩化第1セリウム水和物などの炭化水素媒体懸濁液に、トリアルキルアルミニウムなどの有機アルミニウム化合物を添加して、吸着水または結晶水と有機アルミニウム化合物とを反応させる方法。

(2) ベンゼン、トルエン、エチルエーテル、テトラヒドロフランなどの媒体中で、トリアルキルアルミニウムなどの有機アルミニウム化合物に直接水、冰または水蒸気を作用させる方法。

(3) デカン、ベンゼン、トルエンなどの媒体中でトリアルキルアルミニウムなどの有機アルミニウム化合物に、ジメチルスズオキシド、ジブチルスズオキシドなどの有機スズ酸化物を反応させる方法。

## 【0043】

なお該アルミニノキサンは、少量の有機金属成分を含有してもよい。また回収された上記のアルミニノキサンの溶液から溶媒または未反応有機アルミニウム化合物を蒸留して除去した後、溶媒に再溶解またはアルミニノキサンの貧溶媒に懸濁させてもよい。

アルミニノキサンを調製する際に用いられる有機アルミニウム化合物として具体的には、前記(B-1a)に属する有機アルミニウム化合物として例示したものと同様の有機アルミニウム化合物を挙げることができる。

## 【0044】

これらのうち、トリアルキルアルミニウム、トリシクロアルキルアルミニウムが好ましく、トリメチルアルミニウムが特に好ましい。

上記のような有機アルミニウム化合物は、1種単独でまたは2種以上組み合せて用いられる。

なお、トリメチルアルミニウムから調製されるアルミニノキサンは、メチルアルミニノキサンあるいはMAOと呼ばれ、特によく用いられる化合物である。

#### 【0045】

アルミニノキサンの調製に用いられる溶媒としては、ベンゼン、トルエン、キシレン、クメン、シメンなどの芳香族炭化水素、ペンタン、ヘキサン、ヘプタン、オクタン、デカン、ドデカン、ヘキサデカン、オクタデカンなどの脂肪族炭化水素、シクロペンタン、シクロヘキサン、シクロオクタン、メチルシクロペンタンなどの脂環族炭化水素、ガソリン、灯油、軽油などの石油留分または上記芳香族炭化水素、脂肪族炭化水素、脂環族炭化水素のハロゲン化物とりわけ、塩素化物、臭素化物などの炭化水素溶媒が挙げられる。さらにエチルエーテル、テトラヒドロフランなどのエーテル類を用いることもできる。これらの溶媒のうち特に芳香族炭化水素または脂肪族炭化水素が好ましい。

#### 【0046】

また本発明で用いられるベンゼン不溶性の有機アルミニウムオキシ化合物は、60℃のベンゼンに溶解するA1成分がA1原子換算で通常10%以下、好ましくは5%以下、特に好ましくは2%以下であり、ベンゼンに対して不溶性または難溶性である。

本発明で用いられる有機アルミニウムオキシ化合物としては、下記一般式【I】で表されるボロンを含んだ有機アルミニウムオキシ化合物を挙げることもできる。

#### 【0047】

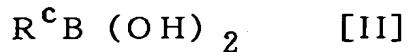


(式中、R<sup>c</sup>は炭素原子数が1~10の炭化水素基を示す。R<sup>d</sup>は、互いに同一でも異なっていてもよく、水素原子、ハロゲン原子または炭素原子数が1~10の炭化水素基を示す。)

前記一般式【I】で表されるボロンを含んだ有機アルミニウムオキシ化合物は、下記一般式【II】で表されるアルキルボロン酸と有機アルミニウム化合物とを

、不活性ガス雰囲気下に不活性溶媒中で、-80℃～室温の温度で1分～24時間反応させることにより製造できる。

## 【0048】



(式中、 $R^c$ は前記と同じ基を示す。)

前記一般式 [II] で表されるアルキルボロン酸の具体的なものとしては、メチルボロン酸、エチルボロン酸、イソプロピルボロン酸、n-プロピルボロン酸、n-ブチルボロン酸、イソブチルボロン酸、n-ヘキシルボロン酸、シクロヘキシルボロン酸、フェニルボロン酸、3,5-ジフルオロボロン酸、ペンタフルオロフェニルボロン酸、3,5-ビス(トリフルオロメチル)フェニルボロン酸などが挙げられる。これらの中では、メチルボロン酸、n-ブチルボロン酸、イソブチルボロン酸、3,5-ジフルオロフェニルボロン酸、ペンタフルオロフェニルボロン酸が好ましい。これらは1種単独でまたは2種以上組み合わせて用いられる。

## 【0049】

このようなアルキルボロン酸と反応させる有機アルミニウム化合物として具体的には、上述した(B-1)に属する有機アルミニウム化合物として例示したものと同様の有機アルミニウム化合物を挙げることができる。

これらのうち、トリアルキルアルミニウム、トリシクロアルキルアルミニウムが好ましく、特にトリメチルアルミニウム、トリエチルアルミニウム、トリイソブチルアルミニウムが好ましい。これらは1種単独でまたは2種以上組み合わせて用いられる。

## 【0050】

上記のような(B-2)有機アルミニウムオキシ化合物は、1種単独でまたは2種以上組み合わせて用いられる。

(B-3) メタロセン化合物 (A) と反応してイオン対を形成する化合物

本発明で用いられるメタロセン化合物 (A) と反応してイオン対を形成する化合物(B-3) (以下、「イオン化イオン性化合物」という。) としては、特開平1-501950号公報、特開平1-502036号公報、特開平3-179005号公報、特開平3-179006号公報、特開平3-207703号公報、特

開平3-207704号公報、U.S.P.-5321106号などに記載されたルイス酸、イオン性化合物、ボラン化合物およびカルボラン化合物などを挙げることができる。

## 【0051】

具体的には、ルイス酸としては、 $BR_3$  (Rは、フッ素、メチル基、トリフルオロメチル基などの置換基を有していてもよいフェニル基またはフッ素である。) で示される化合物が挙げられ、たとえば

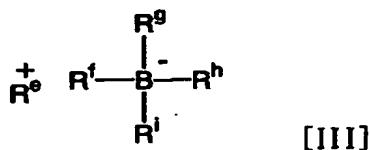
トリフルオロボロン、トリフェニルボロン、トリス(4-フルオロフェニル)ボロン、トリス(3,5-ジフルオロフェニル)ボロン、トリス(4-フルオロメチルフェニル)ボロン、トリス(ペンタフルオロフェニル)ボロン、トリス(p-トリル)ボロン、トリス(o-トリル)ボロン、トリス(3,5-ジメチルフェニル)ボロンなどが挙げられる。

## 【0052】

イオン化イオン性化合物としては、たとえば下記一般式【III】で表される化合物が挙げられる。

## 【0053】

## 【化12】



## 【0054】

式中、 $R^e$ としては、 $H^+$ 、カルボニウムカチオン、オキソニウムカチオン、アンモニウムカチオン、ホスホニウムカチオン、シクロヘプチルトリエニルカチオン、遷移金属を有するフェロセニウムカチオンなどが挙げられる。

$R^f \sim R^i$ は、互いに同一でも異なっていてもよく、有機基、好ましくはアリール基または置換アリール基である。

## 【0055】

前記カルボニウムカチオンとして具体的には、トリフェニルカルボニウムカチ

オン、トリ（メチルフェニル）カルボニウムカチオン、トリ（ジメチルフェニル）カルボニウムカチオンなどの三置換カルボニウムカチオンなどが挙げられる。

前記アンモニウムカチオンとして具体的には、トリメチルアンモニウムカチオン、トリエチルアンモニウムカチオン、トリプロピルアンモニウムカチオン、トリブチルアンモニウムカチオン、トリ（n-ブチル）アンモニウムカチオンなどのトリアルキルアンモニウムカチオン、N,N-ジメチルアニリニウムカチオン、N,N-ジエチルアニリニウムカチオン、N,N-2,4,6-ペンタメチルアニリニウムカチオンなどのN,N-ジアルキルアニリニウムカチオン；ジ（イソプロピル）アンモニウムカチオン、ジシクロヘキシルアンモニウムカチオンなどのジアルキルアンモニウムカチオンなどが挙げられる。

#### 【0056】

前記ホスホニウムカチオンとして具体的には、トリフェニルホスホニウムカチオン、トリ（メチルフェニル）ホスホニウムカチオン、トリ（ジメチルフェニル）ホスホニウムカチオンなどのトリアリールホスホニウムカチオンなどが挙げられる。

R<sup>e</sup>としては、カルボニウムカチオン、アンモニウムカチオンなどが好ましく、特にトリフェニルカルボニウムカチオン、N,N-ジメチルアニリニウムカチオン、N,N-ジエチルアニリニウムカチオンが好ましい。

#### 【0057】

またイオン化イオン性化合物として、トリアルキル置換アンモニウム塩、N,N-ジアルキルアニリニウム塩、ジアルキルアンモニウム塩、トリアリールホスフォニウム塩などを挙げることもできる。

トリアルキル置換アンモニウム塩として具体的には、たとえばトリエチルアンモニウムテトラ（フェニル）ホウ素、トリプロピルアンモニウムテトラ（フェニル）ホウ素、トリ（n-ブチル）アンモニウムテトラ（フェニル）ホウ素、トリメチルアンモニウムテトラ（p-トリル）ホウ素、トリメチルアンモニウムテトラ（o-トリル）ホウ素、トリ（n-ブチル）アンモニウムテトラ（ペンタフルオロフェニル）ホウ素、トリプロピルアンモニウムテトラ（o,p-ジメチルフェニル）ホウ素、トリ（n-ブチル）アンモニウムテトラ（m,m-ジメチルフェニル）ホウ素、ト

リ (n-ブチル) アンモニウムテトラ (p-トリフルオロメチルフェニル) ホウ素、トリ (n-ブチル) アンモニウムテトラ (3,5-ジトリフルオロメチルフェニル) ホウ素、トリ (n-ブチル) アンモニウムテトラ (o-トリル) ホウ素などが挙げられる。

## 【0058】

N,N-ジアルキルアニリニウム塩として具体的には、たとえばN,N-ジメチルアニリニウムテトラ (フェニル) ホウ素、N,N-ジエチルアニリニウムテトラ (フェニル) ホウ素、N,N-2,4,6-ペンタメチルアニリニウムテトラ (フェニル) ホウ素などが挙げられる。

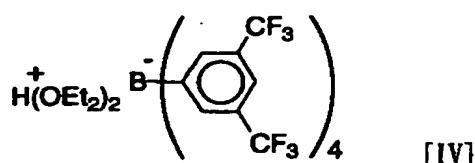
ジアルキルアンモニウム塩として具体的には、たとえばジ (1-プロピル) アンモニウムテトラ (ペンタフルオロフェニル) ホウ素、ジシクロヘキシルアンモニウムテトラ (フェニル) ホウ素などが挙げられる。

## 【0059】

さらにイオン化イオン性化合物として、トリフェニルカルベニウムテトラキス (ペンタフルオロフェニル) ボレート、N,N-ジメチルアニリニウムテトラキス (ペンタフルオロフェニル) ボレート、フェロセニウムテトラ (ペンタフルオロフェニル) ボレート、トリフェニルカルベニウムペンタフェニルシクロペンタジエニル錯体、N,N-ジエチルアニリニウムペンタフェニルシクロペンタジエニル錯体、下記式 [IV] または [V] で表されるホウ素化合物などを挙げることもできる。

## 【0060】

## 【化13】

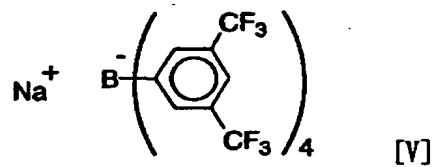


## 【0061】

(式中、Et はエチル基を示す。)

## 【0062】

## 【化14】



## 【0063】

ボラン化合物として具体的には、たとえば  
 デカボラン(14)、  
 ビス[トリ(n-ブチル)アンモニウム]ノナボレート、ビス[トリ(n-ブチル)アンモニウム]デカボレート、ビス[トリ(n-ブチル)アンモニウム]ウンデカボレート、ビス[トリ(n-ブチル)アンモニウム]ドデカボレート、ビス[トリ(n-ブチル)アンモニウム]デカクロロデカボレート、ビス[トリ(n-ブチル)アンモニウム]ドデカクロロドデカボレートなどのアニオンの塩、  
 トリ(n-ブチル)アンモニウムビス(ドデカハイドライドドデカボレート)コバルト酸塩(III)、ビス[トリ(n-ブチル)アンモニウム]ビス(ドデカハイドライドドデカボレート)ニッケル酸塩(III)などの金属ボランアニオンの塩などが挙げられる。

## 【0064】

カルボラン化合物として具体的には、たとえば4-カルバノナボラン(14)、1,3-ジカルバノナボラン(13)、6,9-ジカルバデカボラン(14)、ドデカハイドライド-1-フェニル-1,3-ジカルバノナボラン、ドデカハイドライド-1-メチル-1,3-ジカルバノナボラン、ウンデカハイドライド-1,3-ジメチル-1,3-ジカルバノナボラン、7,8-ジカルバウンデカボラン(13)、2,7-ジカルバウンデカボラン(13)、ウンデカハイドライド-7,8-ジメチル-7,8-ジカルバウンデカボラン、ドデカハイドライド-11-メチル-2,7-ジカルバウンデカボラン、トリ(n-ブチル)アンモニウム1-カルバデカボレート、トリ(n-ブチル)アンモニウム1-カルバドデカボレート、トリ(n-ブチル)アンモニウム1-トリメチルシリル-1-カルバデカボレート、

トリ (n-ブチル) アンモニウムプロモ-1-カルバドデカボレート、トリ (n-ブチル) アンモニウム6-カルバデカボレート (14)、トリ (n-ブチル) アンモニウム6-カルバデカボレート (12)、トリ (n-ブチル) アンモニウム7-カルバウンデカボレート (13)、トリ (n-ブチル) アンモニウム7,8-ジカルバウンデカボレート (12)、トリ (n-ブチル) アンモニウム2,9-ジカルバウンデカボレート (12)、トリ (n-ブチル) アンモニウムドデカハイドライド-8-メチル-7,9-ジカルバウンデカボレート、トリ (n-ブチル) アンモニウムウンデカハイドライド-8-エチル-7,9-ジカルバウンデカボレート、トリ (n-ブチル) アンモニウムウンデカハイドライド-8-ブチル-7,9-ジカルバウンデカボレート、トリ (n-ブチル) アンモニウムウンデカハイドライド-8-アリル-7,9-ジカルバウンデカボレート、トリ (n-ブチル) アンモニウムウンデカハイドライド-9-トリメチルシリル-7,8-ジカルバウンデカボレート、トリ (n-ブチル) アンモニウムウンデカハイドライド-4,6-ジブロモ-7-カルバウンデカボレートなどのアニオンの塩；

トリ (n-ブチル) アンモニウムビス (ノナハイドライド-1,3-ジカルバノナボレート) コバルト酸塩 (III)、トリ (n-ブチル) アンモニウムビス (ウンデカハイドライド-7,8-ジカルバウンデカボレート) 鉄酸塩 (III)、トリ (n-ブチル) アンモニウムビス (ウンデカハイドライド-7,8-ジカルバウンデカボレート) コバルト酸塩 (III)、トリ (n-ブチル) アンモニウムビス (ウンデカハイドライド-7,8-ジカルバウンデカボレート) ニッケル酸塩 (III)、トリ (n-ブチル) アンモニウムビス (ウンデカハイドライド-7,8-ジカルバウンデカボレート) 銅酸塩 (III)、トリ (n-ブチル) アンモニウムビス (ウンデカハイドライド-7,8-ジカルバウンデカボレート) 金酸塩 (III)、トリ (n-ブチル) アンモニウムビス (ノナハイドライド-7,8-ジメチル-7,8-ジカルバウンデカボレート) 鉄酸塩 (III)、トリ (n-ブチル) アンモニウムビス (ノナハイドライド-7,8-ジメチル-7,8-ジカルバウンデカボレート) クロム酸塩 (III)、トリ (n-ブチル) アンモニウムビス (トリブロモオクタハイドライド-7,8-ジカルバウンデカボレート) コバルト酸塩 (III)、トリス [トリ (n-ブチル) アンモニウム] ビス (ウンデカハイドライド-7-カルバウンデカボレート) クロム酸塩 (III)、ビス [トリ (n-ブチル) アンモニウム] ビス (ウンデカハイドライド-7-カルバウンデカボレート) マンガ

ン酸塩(IV)、ビス[トリ(n-ブチル)アンモニウム]ビス(ウンデカハイドライド-7-カルバウンデカボレート)コバルト酸塩(III)、ビス[トリ(n-ブチル)アンモニウム]ビス(ウンデカハイドライド-7-カルバウンデカボレート)ニッケル酸塩(IV)などの金属カルボランアニオンの塩などが挙げられる。

## 【0065】

上記のような(B-3)イオン化イオン性化合物は、1種単独でまたは2種以上組み合せて用いられる。

(C) 微粒子状担体

本発明で必要に応じて用いられる(C)微粒子状担体は、無機または有機の化合物であって、粒径が5~300μm、好ましくは10~200μmの顆粒状ないしは微粒子状の固体が使用される。このうち無機化合物としては多孔質酸化物が好ましく、具体的には $\text{SiO}_2$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{MgO}$ 、 $\text{ZrO}$ 、 $\text{TiO}_2$ 、 $\text{B}_2\text{O}_3$ 、 $\text{CaO}$ 、 $\text{ZnO}$ 、 $\text{BaO}$ 、 $\text{ThO}_2$ など、またはこれらを含む混合物、たとえば $\text{SiO}_2\text{-MgO}$ 、 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{SiO}_2\text{-TiO}_2$ 、 $\text{SiO}_2\text{-V}_2\text{O}_5$ 、 $\text{SiO}_2\text{-Cr}_2\text{O}_3$ 、 $\text{SiO}_2\text{-TiO}_2\text{-MgO}$ などを例示することができる。これらの中で $\text{SiO}_2$ および $\text{Al}_2\text{O}_3$ からなる群から選ばれた少なくとも1種の成分を主成分とするものが好ましい。

## 【0066】

なお、上記無機酸化物には少量の $\text{Na}_2\text{CO}_3$ 、 $\text{K}_2\text{CO}_3$ 、 $\text{CaCO}_3$ 、 $\text{MgCO}_3$ 、 $\text{Na}_2\text{SO}_4$ 、 $\text{Al}_2(\text{SO}_4)_3$ 、 $\text{BaSO}_4$ 、 $\text{KNO}_3$ 、 $\text{Mg}(\text{NO}_3)_2$ 、 $\text{Al}(\text{NO}_3)_3$ 、 $\text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{Li}_2\text{O}$ などの炭酸塩、硫酸塩、硝酸塩、酸化物成分を含有していても差しつかえない。

このような(C)微粒子状担体は、種類および製法によりその性状は異なるが、比表面積が50~1000m<sup>2</sup>/g、好ましくは100~800m<sup>2</sup>/gの範囲にあり、細孔容積が0.3~3.0cm<sup>3</sup>/gの範囲にあることが望ましい。該担体は、必要に応じて80~1000°C、好ましくは100~800°Cで焼成して用いられる。

## 【0067】

さらに、本発明に用いることのできる微粒子状担体(C)としては、粒径が5

～300 μmの範囲にある有機化合物の顆粒状ないしは微粒子状固体を挙げることができる。これら有機化合物としては、エチレン、プロピレン、1-ブテン、4-メチル-1-ペンテンなどの炭素原子数が2～14のα-オレフィンを主成分として生成される重合体もしくは共重合体、またはビニルシクロヘキサン、スチレンを主成分として生成される重合体もしくは共重合体、またはこれら重合体にアクリル酸、アクリル酸エステル、無水マレイン酸等の極性モノマーを共重合またはグラフト重合させて得られる、極性官能基を有する重合体を例示することができる。

### 【0068】

重合の際には、各触媒成分の使用法、添加順序は任意に選ばれるが、以下のような方法が例示される。

- (1) 成分(A)と、(B-1)有機金属化合物、(B-2)有機アルミニウムオキシ化合物および(B-3)イオン化イオン性化合物から選ばれる少なくとも1種の成分(B)（以下単に「成分(B)」という。）とを任意の順序で重合器に添加する方法。
- (2) 成分(A)と成分(B)を予め接触させた触媒を重合器に添加する方法。
- (3) 成分(A)と成分(B)を予め接触させた触媒成分、および成分(B)を任意の順序で重合器に添加する方法。この場合成分(B)は、同一でも異なっていてもよい。
- (4) 成分(A)を微粒子状担体(C)に担持した触媒成分、および成分(B)を任意の順序で重合器に添加する方法。
- (5) 成分(A)と成分(B)とを微粒子状担体(C)に担持した触媒を重合器に添加する方法。
- (6) 成分(A)と成分(B)とを微粒子状担体(C)に担持した触媒成分、および成分(B)を任意の順序で重合器に添加する方法。この場合成分(B)は、同一でも異なっていてもよい。
- (7) 成分(B)を微粒子状担体(C)に担持した触媒成分、および成分(A)を任意の順序で重合器に添加する方法。
- (8) 成分(B)を微粒子状担体(C)に担持した触媒成分、成分(A)、および

成分（B）を任意の順序で重合器に添加する方法。この場合成分（B）は、同一でも異なっていてもよい。

#### 【0069】

上記の微粒子状担体（C）に成分（A）および成分（B）が担持された固体触媒成分はオレフィンが予備重合されていてもよい。

本発明では、重合は溶解重合、懸濁重合などの液相重合法または気相重合法いずれにおいても実施できる。液相重合法において用いられる不活性炭化水素溶媒として具体的には、プロパン、ブタン、ペンタン、ヘキサン、ヘプタン、オクタン、デカン、ドデカン、灯油などの脂肪族炭化水素；シクロペンタン、シクロヘキサン、メチルシクロペンタンなどの脂環族炭化水素；ベンゼン、トルエン、キシレンなどの芳香族炭化水素；エチレンクロリド、クロルベンゼン、ジクロロメタンなどのハロゲン化炭化水素またはこれらの混合物などを挙げることができ、重合に用いる $\alpha$ -オレフィン自身を溶媒として用いることもできる。

#### 【0070】

重合を行うに際して、成分（A）は、反応容積1リットル当り、通常 $10^{-8} \sim 10^{-2}$ モル、好ましくは $10^{-7} \sim 10^{-3}$ モルとなるような量で用いられる。

成分（B-1）は、成分（B-1）と、成分（A）中の遷移金属原子（M）とのモル比 $[(B-1) / M]$ が、通常 $0.01 \sim 5000$ 、好ましくは $0.05 \sim 2000$ となるような量で用いられる。成分（B-2）は、成分（B-2）中のアルミニウム原子と、成分（A）中の遷移金属原子（M）とのモル比 $[(B-2) / M]$ が、通常 $10 \sim 5000$ 、好ましくは $20 \sim 2000$ となるような量で用いられる。成分（B-3）は、成分（B-3）と、成分（A）中の遷移金属原子（M）とのモル比 $[(B-3) / M]$ が、通常 $1 \sim 10$ 、好ましくは $1 \sim 5$ となるような量で用いられる。

#### 【0071】

また、このようなオレフィン重合触媒を用いたオレフィンの重合温度は、通常 $-50 \sim 200^\circ\text{C}$ 、好ましくは $0 \sim 170^\circ\text{C}$ の範囲である。重合圧力は、通常常圧 $\sim 10 \text{ MPa}$ ゲージ圧、好ましくは常圧 $\sim 5 \text{ MPa}$ ゲージ圧の条件下であり、重合反応は、回分式、半連續式、連續式のいずれの方法においても行うことができる。さらに重合を反応条件の異なる2段以上に分けて行うことも可能である。

## 【0072】

重合に際して生成ポリマーの分子量や重合活性を制御する目的で水素を添加することができ、その量はオレフィン1kgあたり0.001~100NL程度が適當である。

本発明において、重合反応に供給されるオレフィンとしては、炭素数2~20のオレフィン、特に炭素数2~10の $\alpha$ -オレフィンが好ましい。具体的には、エチレン、プロピレン、1-ブテン、1-ペンテン、1-ヘキセン、3-メチル-1-ブテン、3-メチル-1-ペンテン、3-エチル-1-ペンテン、4-メチル-1-ペンテン、4-メチル-1-ヘキセン、4,4-ジメチル-1-ヘキセン、4,4-ジメチル-1-ペンテン、4-エチル-1-ヘキセン、3-エチル-1-ヘキセン、1-オクテン、1-デセン、1-ドデセン、1-テトラデセン、1-ヘキサデセン、1-オクタデセン、1-エイコセン、ビニルシクロヘキサン、スチレン等が挙げられる。

## 【0073】

また、さらにブタジエン、1,4-ペンタジエン、1,5-ヘキサジエン、1,4-ヘキサジエン等の炭素数4~20のジエン、あるいは、ジシクロ pentadien、ノルボルネン、メチルノルボルネン、テトラシクロドデセン、メチルテトラシクロドデセン等の環状オレフィン、あるいは、アリルトリメチルシラン、ビニルトリメチルシラン等のケイ素含有オレフィン等が挙げられる。

## 【0074】

本発明においては、製造することを目的としているポリオレフィンが、単一のオレフィンからなるホモポリマーであり、従ってこれらのオレフィンは単独で重合し、ポリオレフィンを製造する。

本発明のオレフィン重合用触媒を用いて、炭素数3以上の $\alpha$ -オレフィンを重合する場合、高い立体規則性を有するオレフィン重合体が得られ、その重合体は通常高いアイソタクティシティを有するという特徴がある。

## 【0075】

## 【発明の効果】

本発明で見出されたメタロセン化合物及びそれを含むオレフィン重合用触媒は、オレフィン重合性能に優れており、工業的に極めて価値がある。

## 【0076】

## 【実施例】

以下に実施例を示しさらに本発明を説明するが、本発明はこれら実施例に制限されるものではない。

本発明において、重合体の融点 ( $T_m$ ) は、示差走査熱量測定 (DSC) によって、240°Cで10分間保持した重合体サンプルを、30°Cまで冷却して5分間保持した後に、10°C/分で昇温させたときの結晶溶融ピークから算出した。

## 【0077】

分子量 ( $M_w$ 、 $M_n$ ) は、GPC (ゲルパーミエイションクロマトグラフィー) により測定した。

デカン可溶部量は、重合体をn-デカンで150°C、2時間処理した後に室温に戻し、n-デカンに溶解した重量%を測定した。

重合体の立体規則性 (mmmm、2,1-挿入、1,3-挿入) は<sup>13</sup>C-NMRスペクトル測定から算出した。

## 【0078】

極限粘度 [ $\eta$ ] は 135°C デカリル中で測定を行った。

MFR (メルトフローレート) は、ポリマーを 230°C で 6 分間加熱した後、測定を行った。

## 【0079】

## 【実施例1】

〔シクロヘキシリデン (3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル) フルオレニルジルコニウムジクロライドの合成〕

(1) 3-tert-ブチル-5-メチル-6,6-ペンタメチレンフルベン

脱水メタノール (50ml) に 1-tert-ブチル-3-メチルシクロペンタジエン (0.5g、3.68mmol) とシクロヘキサン (3.81ml、36.8mmol) を加え、ピロリジン (3.07ml、36.8mmol) を 0°C で滴下し、室温で 7 日間反応させた。0°C で水 (20ml) を加え、エーテルで抽出した後、有機層を水洗、続いて無水硫酸マグネシウムで乾燥後、溶媒を留去して黄色液体 0.8g を得た。分析値を以下に示す。

## 【0080】

<sup>1</sup>H-NMR (270MHz, CDCl<sub>3</sub>中、TMS基準) δ 6.26 (s, 1H)、6.10 (s, 1H)、2.71 (dd, 2H)、2.61 (dd, 2H)、2.27 (d, 3H)、1.80-1.61 (m, 6H)、1.17 (s, 9H)

(2) 1-(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)-1-フルオレニルシクロヘキサン

フルオレン (0.8g, 4.5mmol) のTHF (40ml) 溶液に、氷冷下でn-ブチルリチウムのヘキサン溶液 (2.9ml, 4.6mmol) を窒素雰囲気下で滴下し、さらに室温で6時間攪拌した。さらに、氷冷下でこの赤色溶液に3-tert-ブチル-5-メチル-6,6-ペンタメチレンフルベン (1.0g, 4.8mmol) のTHF (15ml) 溶液を窒素雰囲気下で滴下し、室温で16時間攪拌した後に水 (30ml) を加えた。ジエチルエーテルで抽出、分離した有機相を硫酸マグネシウムで乾燥した後、濾過し、濾液から溶媒を減圧下で除去して淡黄色液体を得た。この液体をヘキサンを溶離液としてシリカゲルカラムに通し、得られたヘキサン溶液から溶媒を減圧下で除去して淡黄色固体を得た。

して1.3gの淡黄色固体を得た。分析値を以下に示す。

## 【0081】

<sup>1</sup>H-NMR (270MHz, CDCl<sub>3</sub>中、TMS基準) δ 7.64 (d, 2H)、7.34-7.24 (m, 4H)、7.16-7.10 (m, 2H)、5.79 (s, 1H)、4.02 (s, 1H)、2.87-2.77 (s+s, 3H)、2.26-2.00 (m, 2H)、1.75-1.60 (s+s, 3H)、1.55-1.23 (m, 8H)、1.12 (d, 9H)

(3) シクロヘキシリデン (3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル) フルオレニルジルコニウムジクロライド

氷冷下で1-(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)-1-フルオレニルシクロヘキサン (1.3g, 3.3mmol) のTHF (40ml) 溶液にn-ブチルリチウムのヘキサン溶液 (4.8ml, 6.8mmol) を窒素雰囲気下で滴下し、さらに室温で16時間攪拌した。反応混合物から溶媒を減圧下で除去

して赤橙色の固体を得た。この固体に-78℃でジクロロメタン(150ml)を加えて攪拌溶解し、次いでこの溶液を-78℃に冷却したジルコニウムテトラクロライド(THF)2錠体(1.1g、2.9mmol)のジクロロメタン(10ml)懸濁液に加え、-78℃で6時間攪拌し、室温で一昼夜攪拌した。この反応溶液から溶媒を減圧下で除去し朱色の固体を得た。さらに、この固体をジエチルエーテルで抽出、セライト濾過し、濾液を濃縮することで析出した赤褐色の固体18mgを母液から分離した。分析値を以下に示す。

## 【0082】

<sup>1</sup>H-NMR(270MHz, CDCl<sub>3</sub>中、TMS基準) δ 8.10(m, 2H)、7.90(d, 1H)、7.76(d, 1H)、7.56-7.46(m, 2H)、7.28-7.18(m, 2H)、6.07(d, 1H)、5.72(d, 1H)、3.73(br, 1H)、3.34(br, 1H)、2.55-2.33(m, 2H)、2.27(s, 3H)、2.05-1.64(m, 6H)、1.08(s, 9H)

## 【0083】

## 【参考例】

[3,6-ジ-tert-ブチルフルオレンの合成]

(1) 4,4'-Di-*t*-butyldiphenylmethaneの合成

300ml二口フラスコを十分に窒素置換し、AlCl<sub>3</sub>38.4g(289mmol)を入れ、CH<sub>3</sub>NO<sub>2</sub>80mlを加えて溶解しこれを1.の溶液とした。滴下口一トと磁気攪拌子を備えた500ml3口フラスコを十分に窒素置換し、これにdiphenylmethane25.6g(152mmol)と2,6-di-*t*-butyl-4-methylphenol43.8g(199mmol)を入れ、CH<sub>3</sub>NO<sub>2</sub>80mlを加えて溶解した。攪拌しながら氷浴で冷却した。1.の溶液を35分かけて滴下した後、反応液を12℃で1h攪拌した。反応液を氷水500ml中に注ぎ、ヘキサン800mlで抽出した。有機層を5%aqNaOH600mlで洗浄、続いてMgSO<sub>4</sub>で乾燥した。MgSO<sub>4</sub>をろ別後、溶媒をエバポレートして得られたオイルを-78℃に冷却して固体を析出させ、それをろ過で回収し、EtOH300mlで洗浄した。減圧下乾燥して4,4'-Di-*t*-butyldiphenylmethaneを得た。収量18.9g

(2) 2,2'-Diiodo-4,4'-Di-t-butyldiphenylmethaneの合成

磁気攪拌子を備えた200mlのフラスコに4,4'-Di-t-butyldiphenylmethane 1.95g (6.96mmol) と  $\text{HIO}_4$  0.78g (3.48mmol)、  $\text{I}_2$  1.55g (6.12mmol)、  $\text{conch}_2\text{SO}_4$  0.48mlを入れた。これに酢酸 17.5ml、水 3.75mlを加え、攪拌しながら90℃に加熱し5h反応させた。反応液を氷水50ml中に注ぎ、 $\text{Et}_2\text{O}$ で抽出した。有機層を飽和aq $\text{NaHSO}_4$  100mlで洗浄、続いて $\text{Na}_2\text{CO}_3$ を添加し、攪拌後 $\text{Na}_2\text{CO}_3$ をろ別。さらに有機層を水800mlで洗浄後、 $\text{Mg}_2\text{SO}_4$ を加えて乾燥した。 $\text{Mg}_2\text{SO}_4$ ろ別後、溶媒を留去して黄色オイルを得た。カラムクロマトグラフィにより精製し、2,2'-Diiodo-4,4'-Di-t-butyldiphenylmethaneを得た。収量3.21g

(3) 3,6-di-t-Butylfluoreneの合成

50ml二口フラスコに2,2'-Diiodo-4,4'-Di-t-butyldiphenylmethane 3.21g (6.03mmol)、銅粉 2.89g (47.0mmol)を入れ、230℃に加熱し、攪拌しながら5hr反応させた。アセトンで抽出し、溶媒留去の後、赤褐色オイルを得た。カラムクロマトグラフィにより薄黄色のオイルを得た。未反応原料を含むフラクションは再度カラムにかけて目的物のみ回収した。メタノールで再結晶して白色固体を得た。収量1.08g

【0084】

## 【実施例2】

[ジメチルメチレン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロヘキサジエニル)(3,6-ジ-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドの合成]

(1) 2-(3-tert-ブチル-5-メチルシクロヘキサジエニル)-2-(3,6-ジ-tert-ブチルフルオレニル) プロパン

3,6-ジ-tert-ブチルフルオレン (0.9g、3.4mmol) のTHF (30ml) 溶液に、氷冷下でn-ブチルリチウムのヘキサン溶液 (2.1ml、3.4mmol) を窒素雰囲気下で滴下し、さらに室温で6時間攪拌した。さらに、氷冷下でこの赤色溶液に3-tert-ブチル-5,6,6-トリメチルフルベン (0.6g、3.5mmol) のTHF (15ml) 溶液を窒素雰囲気下で滴下し、室温で12時間攪拌した後に水 (30ml) を加えた。ジエチルエーテルで抽出、分離し

た有機相を硫酸マグネシウムで乾燥した後、濾過し、濾液から溶媒を減圧下で除去して固体を得た。この固体を熱メタノールから再結晶して1.2 gの淡黄色の固体を得た。分析値を以下に示す。

## 【0085】

$^1\text{H-NMR}$  (270MHz,  $\text{CDCl}_3$ 中, TMS基準)  $\delta$  7.72 (d, 2H)、7.18-7.05 (m, 4H)、6.18-5.99 (s+s, 1H)、4.32-4.18 (s+s, 1H)、3.00-2.90 (s+s, 2H)、2.13-1.98 (t+s, 3H)、1.38 (s, 18H)、1.19 (s, 9H)、1.10 (d, 6H)

(2) ジメチルメチレン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)(3,6-ジ-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライド

氷冷下で2-(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)-2-(3,6-ジ-tert-ブチルフルオレニル) プロパン (1.3 g, 2.8 mmol) のジエチルエーテル (40ml) 溶液にn-ブチルリチウムのヘキサン溶液 (3.6ml, 5.8 mmol) を窒素雰囲気下で滴下し、さらに室温で16時間攪拌した。反応混合物から溶媒を減圧下で除去して赤橙色の固体を得た。この固体に-78°Cでジクロロメタン (150ml) を加えて攪拌溶解し、次いでこの溶液を-78°Cに冷却したジルコニウムテトラクロライド (THF) 2錯体 (1.0 g, 2.7 mmol) のジクロロメタン (10ml) 懸濁液に加え、-78°Cで6時間攪拌し、室温で一夜攪拌した。この反応溶液から溶媒を減圧下で除去しオレンジ色の固体を得た。さらに、この固体をトルエンで抽出、セライト濾過し、濾液から溶媒を減圧下で除去した後、ジエチルエーテルから再結晶し0.18 gのオレンジ色の固体を得た。分析値を以下に示す。

## 【0086】

$^1\text{H-NMR}$  (270MHz,  $\text{CDCl}_3$ 中, TMS基準)  $\delta$  7.98 (dd, 2H)、7.90 (d, 1H)、7.69 (d, 1H)、7.32-7.25 (m, 2H)、6.01 (d, 1H)、5.66 (d, 1H)、2.54 (s, 3H)、2.36 (s, 3H)、2.28 (s, 1H)、1.43 (d, 18H)、1.08 (s, 9H)

## 【0087】

## 【実施例3】

[シクロヘキシリデン(3-*tert*-ブチル-5-メチルシクロペニタジエニル)(3,6-ジ-*tert*-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドの合成]

(1) 1-(3-*tert*-ブチル-5-メチルシクロペニタジエニル)-1-(3,6-ジ-*tert*-ブチルフルオレニル) シクロヘキサン

窒素雰囲気下、3,6-ジ-*tert*-ブチルフルオレン(0.81g、2.91mmol)のTHF(40ml)溶液に、n-ブチルリチウムのヘキサン溶液(1.91ml、3.06mmol)を0℃で滴下後、室温で16時間攪拌した。続けて窒素雰囲気下、この溶液に3-*tert*-ブチル-5-メチル-6,6-ペニタメチレンフルベン(0.69g、3.20mmol)のTHF(30ml)溶液を0℃で滴下し、室温で16時間攪拌し、反応させた。反応後、水(30ml)を加え、エーテルで抽出し、有機相を無水硫酸マグネシウムで乾燥して得られた溶液を減圧下で溶媒を留去して黄色固体1.26gを得た。分析値を以下に示す。

## 【0088】

<sup>1</sup>H-NMR(270MHz、CDCl<sub>3</sub>中、TMS基準) δ 7.64(d、2H)、7.22(d、2H)、7.15(d、d、2H)、6.10、5.76(1H)、3.89(s、1H)、2.82-2.58(2H)、1.70(s、3H)、1.38(s、18H)、1.09(s、9H)、2.26-1.25(10H)

(2) シクロヘキシリデン(3-*tert*-ブチル-5-メチルシクロペニタジエニル)(3,6-ジ-*tert*-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライド

氷冷下で1-(3-*tert*-ブチル-5-メチルシクロペニタジエニル)-1-(3,6-ジ-*tert*-ブチルフルオレニル) シクロヘキサン(1.22g、2.47mmol)のTHF(50ml)溶液にn-ブチルリチウムのヘキサン溶液(3.39ml、5.43mmol)を窒素雰囲気下で滴下し、さらに室温で16時間攪拌した。反応混合物から溶媒を減圧下で除去し、赤橙色の固体を得た。この固体に、-78℃に冷却したジルコニウムテトラクロライド(THF)2錯体(0.93g、2.47mmol)のジクロロメタン(100ml)溶液を加え、自然に室温に昇

温しながら攪拌を続け、反応させた。得られた赤色懸濁液をセライトでろ過しリチウムクロライドを除去した後、オレンジ色のろ液にトルエン（10ml）を加え、固体が析出するまで濃縮した。そのまま-20℃に冷却し、析出した固体を回収後、再度トルエンで再結晶して27mgの赤色固体を得た。分析値を以下に示す。

## 【0089】

<sup>1</sup>H-NMR (270MHz, CDCl<sub>3</sub>中, TMS基準) δ 8.02 (d, 1H)、7.97 (d, 1H)、7.76 (d, 1H)、7.62 (d, 1H)、7.33-7.29 (d, d, 2H)、6.01 (d, 1H)、5.66 (d, 1H)、3.69 (br, d, 1H)、3.29 (br, d, 1H)、2.25 (s, 3H)、2.54~1.53 (m, 8H)、1.44 (s, 9H)、1.43 (s, 9H)、1.07 (s, 9H)

## 【0090】

## 【実施例4】

〔ジメチルメチレン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)(2,7-ジ-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドの合成〕

(1) 2-(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)-2-(2,7-ジ-tert-ブチルフルオレニル) プロパン

2,7-ジ-tert-ブチルフルオレン (0.9g, 3.4mmol) のTHF (30ml) 溶液に、氷冷下でn-ブチルリチウムのヘキサン溶液 (2.1ml, 3.4mmol) を窒素雰囲気下で滴下し、さらに室温で6時間攪拌した。さらに、氷冷下でこの赤色溶液に3-tert-ブチル-5,6,6-トリメチルフルベン (0.6g, 3.5mmol) のTHF (15ml) 溶液を窒素雰囲気下で滴下し、室温で12時間攪拌した後に水 (30ml) を加えた。ジエチルエーテルで抽出、分離した有機相を硫酸マグネシウムで乾燥した後、濾過し、濾液から溶媒を減圧下で除去して1.1gの粗生成物を得た。これを精製することなく、そのまま次の反応に用いた。

(2) ジメチルメチレン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)(2,7-ジ-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライド

氷冷下で2-(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペニタジエニル)-2-(2,7-ジ-tert-ブチルフルオレニル)プロパン(0.87g, 1.92mmol)のTHF(50ml)溶液にn-ブチルリチウムのヘキサン溶液(2.88ml, 4.60mmol)を窒素雰囲気下で滴下し、さらに室温で16時間攪拌した。反応混合物から溶媒を減圧下で除去し、赤橙色の固体を得た。この固体に、-78℃に冷却したジルコニウムテトラクロライド(THF)2錯体(0.72g, 1.92mmol)のジクロロメタン(100ml)溶液を加え、自然に室温に昇温しながら攪拌を続け、反応させた。得られた赤色懸濁液をセライトでろ過しリチウムクロライドを除去した後、オレンジ色のろ液にトルエン(10ml)を加え、固体が析出するまで濃縮した。そのまま-20℃に冷却し、析出した固体を回収後、再度トルエンで再結晶して17mgの赤色固体を得た。分析値を以下に示す。

## 【0091】

<sup>1</sup>H-NMR(270MHz, CDCl<sub>3</sub>中、TMS基準) δ 7.96(d, 1H)、δ 7.94(s, 1H)、δ 7.93(d, 1H)、7.69(s, 1H)、7.59(d, 1H)、7.53(d, 1H)、6.03(d, 1H)、5.68(d, 1H)、2.60(s, 1H)、2.41(s, 1H)、2.31(s, 1H)、1.32(s, 18H)、1.08(s, 9H)

## 【0092】

## 【実施例5】

[ジメチルメチレン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペニタジエニル)(3,6-ジ-tert-ブチルフルオレニル)ジルコニウムジクロライドによるプロピレンの常圧重合]

充分に窒素置換した500mlのガラス製重合装置に、250mlの乾燥トルエンを仕込み、次いでプロピレン置換した後に、実施例2で得られたオレンジ色の固体3.1mg(5μmol)のトルエン溶液にアルミニウム換算で5mmolのメチルアルミノキサン(アルベマール社製)を加えた触媒溶液を添加し、攪拌下、プロピレンを通気しながら25℃で30分重合した。重合後メタノールと少量の塩酸を加えて重合を停止し、ポリマーを濾過してメタノールで洗浄した後、真空下80℃、6時間乾燥した。得られたポリマーは0.7gであった。Tm

= 155°C であった。

## 【0093】

## 【実施例6】

[ジメチルメチレン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロ pentadienyl) (2,7-ジ-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドによるプロピレンの常圧重合]

充分に窒素置換した 500 ml のガラス製重合装置に、250 ml の乾燥トルエンを仕込み、次いでプロピレンをバブリングし飽和させた後に、実施例4で得られたオレンジ色の固体 2.35 mg (3.8 μmol) のトルエン溶液にアルミニウム換算で 5 mmol のメチルアルミニノキサン (アルベマール社製) を加えた触媒溶液を添加し、攪拌下、プロピレンを通気しながら 25°C で 60 分重合した。重合後メタノールと少量の塩酸を加えて重合を停止し、ポリマーを濾過してメタノールで洗浄した後、真空下 80°C、6 時間乾燥した。得られたポリマーは 0.50 g であった。T<sub>m</sub> = 140°C であった。

## 【0094】

## 【実施例7】

[シクロヘキシリデン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロ pentadienyl) フルオレニルジルコニウムジクロライドによるプロピレンのバルク重合]

充分に窒素置換した 50 ml の二つ口フラスコ中に、シリカ担持メチルアルミニノキサンをアルミニウム換算で 2.0 mmol 入れ、ヘプタン 20 ml に懸濁させた。その懸濁液に、実施例1で得られたオレンジ色の固体 1.0 mg (2 μmol) をトルエン溶液として加えた後、次いでトリイソブチルアルミニウム (1 mmol) を加え、30 分攪拌して触媒懸濁液とした。充分に窒素置換した 2000 ml のオートクレーブに 500 g のプロピレンを仕込み、上記の触媒懸濁液を添加し、3.0 ~ 3.5 MPa の圧力下、70°C で 40 分重合した。重合後メタノールを加えて重合を停止し、プロピレンをバージしてポリマーを得た。真空下 80°C で 6 時間乾燥した。得られたポリマーは 103 g であった。このポリマーは T<sub>m</sub> = 139°C、M<sub>w</sub> = 348000、M<sub>n</sub> = 184000、デカン可溶部量 = 0.8 wt % であった。

## 【0095】

## 【実施例8】

[シクロヘキシリデン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペニタジエニル) フルオレニルジルコニウムジクロライドによるプロピレンのバルク重合]

水素を2N L加えた以外は、実施例10と同様にしてプロピレンの重合を行った。得られたポリマーは55gであった。このポリマーは $T_m = 141^\circ\text{C}$ 、 $M_w = 69000$ 、 $M_n = 27000$ であった。またポリマーの立体規則性は、 $mm = 85.8\%$ 、 $2,1\text{-挿入} = 0.08\%$ 、 $1,3\text{-挿入} = 0.02\%$ であった。

## 【0096】

## 【実施例9】

[ジメチルメチレン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペニタジエニル)(3,6-ジ-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドによるプロピレンのバルク重合]

実施例2で得られたオレンジ色の固体1.1mg(1.8 $\mu\text{mol}$ )を用いた以外は、実施例7と同様にしてプロピレンの重合を行った。得られたポリマーは90gであった。このポリマーは $T_m = 154^\circ\text{C}$ 、 $M_w = 321000$ 、 $M_n = 154000$ 、デカン可溶部量=0.1wt%であった。

## 【0097】

## 【実施例10】

[ジメチルメチレン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペニタジエニル)(3,6-ジ-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドによるプロピレンのバルク重合]

水素を1N L加えた以外は、実施例9と同様にしてプロピレンの重合を行った。得られたポリマーは135gであった。このポリマーは $T_m = 156^\circ\text{C}$ 、 $M_w = 82000$ 、 $M_n = 37000$ であった。またポリマーの立体規則性は、 $mm = 94.8\%$ 、 $2,1\text{-挿入}$ と $1,3\text{-挿入}$ は共に検出されなかった。

## 【0098】

## 【実施例11】

[シクロヘキシリデン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペニタジエニル)(3,6-ジ-

-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドによるプロピレンのバルク重合】

実施例3で得られたオレンジ色の固体1.3mg (2μmο1) を用いた以外は、実施例7と同様にしてプロピレンの重合を行った。得られたポリマーは4.9gであった。このポリマーは  $T_m = 155^{\circ}\text{C}$ 、  $M_w = 357000$ 、  $M_n = 193000$ 、 デカン可溶部量 = 0.3wt% であった。

#### 【0099】

##### 【実施例12】

【シクロヘキシリデン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)(3,6-ジ-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドによるプロピレンのバルク重合】

水素を1NL加えた以外は、実施例11と同様にしてプロピレンの重合を行った。得られたポリマーは3.28gであった。このポリマーは  $T_m = 156^{\circ}\text{C}$ 、  $M_w = 117000$ 、  $M_n = 52000$ 、 デカン可溶部量 = 0.1wt% であった。またポリマーの立体規則性は、 mmmmm = 95.6%、 2,1-挿入と1,3-挿入は共に検出されなかった。

#### 【0100】

##### 【実施例13】

【シクロヘキシリデン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)(3,6-ジ-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドによるプロピレンのバルク重合】

水素を1NL加え、重合温度を60°Cにした以外は、実施例11と同様にしてプロピレンの重合を行った。得られたポリマーは2.52gであった。このポリマーは  $T_m = 158^{\circ}\text{C}$ 、  $M_w = 97000$ 、  $M_n = 45000$ 、 デカン可溶部量 = 0.1wt% であった。またポリマーの立体規則性は、 mmmmm = 97.0%、 2,1-挿入と1,3-挿入は共に検出されなかった。

#### 【0101】

##### 【実施例14】

【シクロヘキシリデン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)(3,6-ジ

—tert—ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドによるプロピレンのバルク重合】

水素を0.5N L加え、トリイソブチルアルミニウム(1mmol)に代わってトリエチルアルミニウム(1mmol)を使用したこと以外は実施例11と同様にしてプロピレンの重合を行った。得られたポリマーは295gであった。このポリマーは $T_m = 157^\circ\text{C}$ 、 $M_w = 147000$ 、 $M_n = 71000$ 、デカン可溶部量=0.1wt%であった。

### 【0102】

#### 【実施例15】

【ジメチルメチレン(3-tert-ブチル-5-メチルシクロペンタジエニル)(2,7-ジ-tert-ブチルフルオレニル) ジルコニウムジクロライドによるプロピレンのバルク重合】

実施例4で得られたオレンジ色の固体1.2mg(2 $\mu\text{mol}$ )を用いた以外は実施例7と同様にしてプロピレンの重合を行った。得られたポリマーは41gであった。このポリマーは $T_m = 141^\circ\text{C}$ 、 $M_w = 524000$ 、 $M_n = 274000$ 、デカン可溶部量=0.1wt%であった。またポリマーの立体規則性は、 $m\text{mmmm} = 88.4\%$ 、 $2,1\text{-挿入} = 0.04\%$ 、 $1,3\text{-挿入} = 0.07\%$ であった。

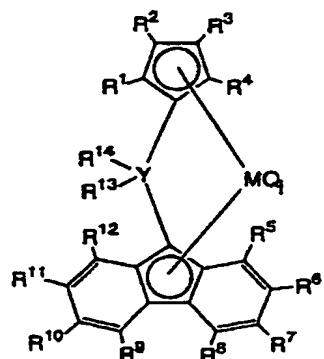
【書類名】 要約書

【要約】

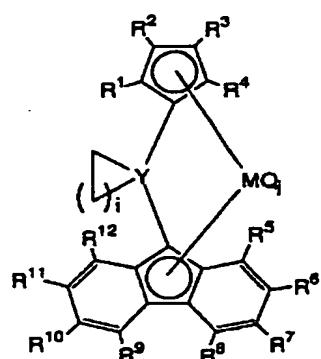
【課題】 新規なメタロセン化合物とそれを含むオレフィン重合用触媒、及びポリオレフィンの製造方法を提供すること。

【解決手段】 メタロセン化合物は、下記一般式 [1] または [2] で表される。

【化1】



[1]



[2]

(式中、R<sup>1</sup>、R<sup>3</sup>は炭化水素基、ケイ素含有炭化水素基、R<sup>2</sup>、R<sup>4</sup>、R<sup>5</sup>、R<sup>6</sup>、R<sup>7</sup>、R<sup>8</sup>、R<sup>9</sup>、R<sup>10</sup>、R<sup>11</sup>、R<sup>12</sup>は水素、炭化水素基、ケイ素含有炭化水素基、R<sup>13</sup>、R<sup>14</sup>は水素、炭化水素基、Mは周期表第4族金属、Yは炭素またはケイ素、Qはハロゲン、炭化水素基等、jは1～4の整数、iは1～10の整数。)

【選択図】 なし

出願人履歴情報

識別番号 [000005887]

1. 変更年月日 1997年10月 1日

[変更理由] 名称変更

住 所 東京都千代田区霞が関三丁目2番5号  
氏 名 三井化学株式会社